

自閉症状把握のためのチェックリスト作成のこころみ

——幼児期の状態像と予後との関連を考えて——

障害児の福祉に関する研究(2)

研究第7部 野田幸江

I はじめに

自閉児の予後を検討するにあたり、これまでに年長自閉児の実態調査及び個々の Case の症例研究を行ってきた。それは今後この問題を更に発展させ、最終的には自閉児に対するよりよい治療的アプローチとはどのようなものであるかを検討して行くためのものであり、そのためには、ある一定の年齢時における状態像を同一の視点からとらえ、そこにかかわる条件を分析検討する事をつみかさねて行かねばならず、その基準作りの第1歩として自閉児が持つといわれる行動特徴のチェックリストを試作。幼児期と年長期とではどのような変化をみせているかを知ることにより、予後の予測と同時に、その時に見落してはならない治療的接近の目安をたてるのに有効な状態把握のための資料検討を行なうのが今回の研究の目的である。

II チェックリスト及び対象児

今回試作されたチェックリストは、自閉児の相談治療に5年以上の経験を持つセラピスト6名を中心に、ローナ・ウイングがあげている自閉症児の特徴を参考に、われわれの経験から、なるべく具体的な行動をあげるよう努力した。チェックすべき行動の領域としては、「感覚」「社会性」「言語」「執着」「生活習慣」「知的発達」「自己統制」をあげた。

回答を依頼したものは、3～4歳児より、われわれが

第2表 三群の性別、年齢別構成及び所属集団状況

	性別	年 齢					普通学級	特殊学級	養護学校	通園施設	断設入所	計
		11歳	12歳	13歳	14歳	15歳						
重度群	男		3		3			2	2		2	6
	女	1			2					2	1	3
中度群	男	2			3	1		2	4			6
軽度群	男		2	2			1					5

相談を受け現在でも1～3ヶ月に1回は母親との面接及び本人の行動観察を実行。既に11歳～15歳を迎えている自閉児20名である。回答は、同一の質問項目に、異常と感じた当時、及び現在の状態の両方について、チェックしてもらったものである。幼児期の時期を同一年齢にしなければならなかった点については、問題が残るところであろうが、すでに10歳を過ぎている子ども達の母親に年齢を指定する程の正確さを求めても無理であろうと考えたからであると同時に、特徴の有無もさることながら同じ特徴でも年齢とともに変化しやすいものと、そうでないものがあるなら、それを検討することこそ今回の研究の目的のためにはより重要であると考えたからである。

対象児の年齢構成は第1表に示す通りである。

第1表 対象児の構成

	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	計
男	2	5	5	4	1	17
女	1		2			3
計	3	5	7	4	1	20

III 結果及び考察

結果の整理にあたっては、まず回答を得た対象児を、現在の状態で重度、中度、軽度の三群に分ける事を試みた。これは将来予後との関係をも含めたチェックリストを作りあげたいと考えたからである。三群の決定にあ

第3表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
聴覚にみられる特異さ (問1, 2)	過去にのみみられたもの	2	11.1	3	25.0	2	20.0
	現在みられるもの	3	16.7	3	25.0	1	10.0
	過・現, 共にみられるもの	2	11.1	1	8.3	2	20.0
視覚にみられる特異さ (問3, 4, 5)	過去にのみみられるもの	3	11.1	2	11.1		
	現在みられるもの	5	18.5	3	16.7		
	共にみられるもの	2	7.4	1	5.6	4	26.7
嗅覚にみられる特異さ (問9)	過去にのみみられるもの	2	22.2	1	16.7	1	20.0
	現在みられるもの	2	22.2	1	16.7	1	20.0
	共にみられるもの	2	22.2	2	33.3		
味覚にみられる特異さ (問10, 12)	過去にのみみられるもの	4	22.2	4	33.3	2	20.0
	現在みられるもの			1	8.3		
	共にみられるもの	7	38.9	1	8.3	3	30.0
計	過去にのみみられるもの	11	15.3	10	18.5	5	11.1
	現在みられるもの	10	13.9	8	14.8	2	4.4
	共にみられるもの	13	18.1	5	9.3	9	20.0

第4表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
痛感覚にみられる特異さ (問6, 7)	過去にのみみられたもの	3	16.7	3	25.0	4	40.0
	現在みられたもの	3	16.7	1	8.3		
	過・現, 共にみられるもの	1	5.6				
その他の感覚にみられる 特異さ (問8, 11)	過去にのみみられたもの	1	5.6	3	25.0	2	20.0
	現在みられるもの	3	16.7	2	16.7		
	過・現, 共にみられるもの	4	22.2				
計	過去にのみみられたもの	4	11.1	6	25.0	6	30.0
	現在みられるもの	6	16.7	3	12.5		
	過・現, 共にみられるもの	5	13.9				

って、現在像から、自閉性、社会適応を主として、まず重度群、軽度群を決定、そのどちらへも入れがたいものを中度群とした。

重度群の示す主な状態像をあげるならば、対話としての言葉は殆どなく、物に対する興味操作も殆どみられていない。

それに対して軽度群の5名は、多少の問題はあるが、いずれも受入れ側の一方的な好意にのみすがるといふ状態ではなく普通学級に通学している子ども達である。自閉児の持つ固執傾向、融通のなさ、抽象思考の不得手さ等を持ちながらも一応の対話も可能であり、他の存在を

認め、それを受入れようとする態度があり、かなりの凸凹はあるが学習にも何とかついている子ども達である。

次いで以上の三群に自閉児のもつ特異さが、過去にのみおいてみられたとするもの、現在みられるもの、過去現在ともにみられるもの、がどれ程いるかを各領域別に検討をして行った。

<感覚の領域にみられた特徴>

人間が外界と接触して行く上での両者の接点ともいえる感覚領域にみられる自閉児が、示す特異さについては、その原因が情緒障害説から知覚障害・認知障害説へと広がりつつある現在、それ等を実証すべく諸感覚につ

いて種々の実験が試みられているが、ここではごく普通に日常生活の中でみられる具体的な行動を通して、その特徴をとらえてみた。

感覚に関する質問は次のとおりであり、結果は第3表、第4表に示す通りである。

- 問1 時々大きな音でも無視する（大きい音がしたり、手をたたいたりしても、見まわしたり、まばたきしたりしない）
- 問2 何か嫌いな音がある、或いは大きな音を嫌う（叫んだり、耳をふさいだりする）
- 問3 たびたび手を目の近くに持って行き、ねじったり指を閉じたり開いたりする
- 問4 子ども自身がいるはずだと思っている場所から母親が少しでも移動すると、目に入らなくなり、泣き騒ぐことがある）
- 問5 横目を使ったり、空を見つめる
- 問6 痛みを感ずることが少ない
- 問7 理由もなしに自分を傷つけたり、頭や額をたたく
- 問8 あるものの感触（毛皮、ナイロンの靴下）を好む
- 問9 何でもおいをかいてみるくせがある
- 問10 何でも口に入れてしまう
- 問11 高い所をまったくこわがらない
- 問12 食べ物の好き嫌いがはげしい

ここで示した%は、すべてのものが、その領域の問題すべてに特異さを示した場合を100とした時のそのグループに所属した者の回答が示した割合である。

第3表は、感覚の中でも、感覚の差異が刺激の差異に比較的正確に相応するといわれている、いわゆる特殊感覚についてまとめたものである。

これ等の表からいえることは、全体の傾向として、当然の事ながら現在の状態では重度群から中度、軽度となるに従って、特異さを示す割合が減じており、当初のわれわれの予想を裏切るものではなかったが、その差が意外に少なかったこと、及び軽度群に過去現在同じ特異さを示すものの割合が重度群よりむしろ多かったことについては、今後の検討が期待される大きな問題を示唆するものであろう。なお個々の感覚領域について吟味を加えるなら、以下のことがいえるであろう。

(1) 視覚においては、重・中度群共に過去より現在に特異さを示したものが多く、過去現在共に特異さを示したものは、その数の $\frac{1}{2}$ の割合しかないので、軽度群では特異さをあげたものすべてが過去から現在までそれが続いているとしている。

(2) 味覚では、過去において特異さを示したものの約半分が現在まで、それを持ち続け、あとの半分では消失、他の領域にみられる、過去よりむしろ現在にみられるという現象はここではみられていない。

(3) 重度群では、聴覚、視覚、嗅覚で過去よりも現在に於て特異さを示すとしたものが同程度、或いはやや多くなっているものに対し、軽度群では、現在で減じているものが多い。という事は重度の場合、発達的な問題も加わり、むしろ具体的な行動としてその特異さをあらわすのが軽度の場合より遅れる状態にあり、自閉性の程度を云々する場合、その行動上にみられるサインの多少は大きな目安とはなるが、そこに発達上の問題がある事を見落してはならない事を強く示唆する結果といえるであろう。

(4) 普通感覚については、軽度群では過去から現在へと確実な変化がみられているが、重度群では殆ど変化がみられず、その他の感覚では幼児期より現在に多くその特異さがみられるようになっていくことがわかる。

以上、特殊感覚より普通感覚において軽度群のものに変化しやすい傾向があるという事が出来る。

<社会性にみられる特異さ>

主として人間関係を中心に作られたものであるが、その質問は以下に示す通りである。

<人に対して>

- 問13 身体接触を嫌う
- 問14 他人を無視する
- 問15 見知らぬ人に親しすぎる
- 問16 他人の感情を理解しないようである
- 問17 自分が困った時にも助けを求めない
- 問18 話しかけられるのを嫌い耳をおおったり叫び声をあげる
- 問19 他人の会話に興味を示さない
- 問20 自分の欲しい物のところへ人の手をひっぱって行き用をたす

<子どもに対して>

- 問21 他の子どもに対して
- (イ) まわりに子どもがいてもまったく無関心
- (ロ) まったく無関心ではないが一緒に遊ぼうとしない
- (ハ) 一緒に遊んでいる様に見える時もあるが交流してはいない
- (ニ) 交流して遊ぶ

<家族に対して>

- 問22 母親から離れようとする、いつもくっついてい

第5表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
人との関係にみられる 特異さ (問13~20)	過去にのみみられた者	18	25.0	18	42.9	14	35.0
	現在みられる者	13	18.1	7	16.7	2	5.0
	過・現、共にみられる者	8	11.1	4	9.5	3	7.5
家族に対する態度にみ られる特異さ (問22~24)	過去にのみみられる者	7	25.9	6	33.3	4	26.7
	現在みられる者	3	11.1				
	過・現、共にみられる者	1	3.7				
計	過去にのみみられる者	25	23.1	24	33.3	18	30.0
	現在みられる者	16	14.8	7	9.7	2	3.3
	過・現、共にみられる者	9	8.3	4	5.6	3	5.0
総 計		50	46.3	35	48.6	23	38.3

問23 兄弟にも他人とは異なった親しみを感じていないようである

問24 父親が帰宅しても特に喜ぶ様子がない

結果の整理は感覚領域で行ったのとまったく同じ手続きをふみ、得たのが第5表である。

ここでも、軽度群に於て特異さを示したものは、過去においてむしろ重度群より多い割合を占めているが、現在では著しく減じている。特に家族に対する態度では、重度以外の群では現在、特異さを示すものは1人もいない。全体を通じ人間関係領域は先の感覚領域に比し、変化しやすい領域といえそうである。

第6表

		重 度	中 度	軽 度
		平均得点	平均得点	平均得点
子どもとの関係 問21	過去		0.77	0.75
	現均	0.57	0.33	0.25

子どもとの関係では、その関係の持ち方を段階的に提示、回答を求めたためそれぞれに0~1までの均等割り得点を与え、各個人の得点を算出平均値を出したものが第6表である。得点は「子どもにまったく無関心」を0とし、「交流して遊ぶ」を1としたもので、得点が高くなる程、子どもとの関係が持てる事を表わしている。第6表において重度群の過去を空欄としたのは、回答を得たものが2名しかなかったためであり、なぜここだけに回答が少なかったかの理由については、まったく不明である。現時点における対象児の子どもとの関係をみると、重度群では回答の(ロ)と(イ)の間に、軽度群では(イ)と(ウ)の間に平均得点があり、その間に一段階の差がある。そして中度群は丁度その中間にあるといえる。なおここでも他の人間関係同様、幼児からの変化はかなり大きい。

<言語にみられる特異さ>

自閉児の言語に様々な特徴があることは、既にひろく知られるところであり、言語発達のおくれを心配して相談に訪れる例も少なくないばかりか、これまでに出版されている予後調査の中で、予後の良否と関係の深いものとして幼児期における言語の有無をあげているものも多い。そこで今回は言語の特徴を、発達状態及び言語理解や表現にみられる特異さとにわけて検討を加えてみよう。使用された問は次に示す通りである。

<発達上にみられる問題>

問25 言葉の理解の程度は

- (イ) まったく言葉を理解していないようである
- (ロ) 理解しているかどうかははっきりわからない
- (ハ) わずかの単純なことばだけしか理解しない
- (ニ) 指示されると応じようとするが、いわれている事がわからず戸惑った表情をする
- (ホ) 簡単な指示は理解できるが同時に二つ以上の指示を与えられると理解できない
- (ヘ) たいていの事は理解し、指示に応ずる

問26 表現として使えることばは

- (イ) 意味のない声をあげたり奇声を発するだけである
- (ロ) アーアーで何でも表現する
- (ハ) 単語はいうが場面にそぐわない事が多い
- (ニ) 場面に適切なことばが使える
 - i 単語
 - ii 二語文
 - iii 文にはなるが助詞を抜かしたり使い方を間違う
 - iv 普通に文が話せるが対話にならない
 - v 対話ができる

- 問27 言葉がふえない
- 問28 話したのにことばがなくなってしまった
<ことばの持つ特異さ>
- 問29 ことばにならず音声のよくようだけで話す
- 問30 自分で言葉を作って使う
- 問31 ことばの頭の部分、あるいは語尾だけをいう
- 問32 一つの意味を色々な意味に用いる
- 問33 聞いたことばをすぐにオーム返しする
- 問34 たえずひとりごとをいう
- 問35 ことばの意味をとらえず、文の中の一部分に反応する
- 問36 同じことを何度もくり返しいう
- 問37 自分が答えたいためにまわりのものに質問させる
- 問38 調子が平らで一本調子である
- 問39 能動と受動の混乱がある
- 問40 話しかけられるのを嫌い、耳をおおったり叫び声をあげる
- 問41 自分の名前を呼ばれてもふりむかない
- 問42 他人の会話に興味を示さない

まず発達上にみられる問題について、3群の傾向を求めたのが第7表である。

第7表

発 達		重 度	中 度	軽 度
		平均得点	平均得点	平均得点
理 解 問25	過去	0.38	0.42	0.44
	現在	0.71	0.76	0.83
表 現 問26	過去	0.20	0.26	0.32
	現在	0.42	0.86	0.96

言語理解の面では3群とも、平均得点のうえでかなりの進歩をみることができるが、その進歩の幅は重度軽度群いずれも平均得点に於てほぼ2倍になっている事がわかる。一方、言語表現となると、過去の平均得点では、3群間にそれ程大きな差がないこと。重度群から軽度群になるに従って平均得点があがっていることは言語理解と同じような傾向を示しているが、軽度群の方により大

第8表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
ことばの特異さ 問29~39	過去にのみみられたもの	5	5.1	11	16.7	10	18.2
	現在みられるもの	14	14.1	8	12.1	7	12.7
	過・現、共にみられるもの	4	4.0	4	6.1	6	10.9

きな進歩がみられている。即ち言語理解は3群とも表現より幼児期においてはまさり、重度群における理解力の進歩は現在の表現力を示す平均得点より高くなっているが、軽度群においては、むしろ表現力の方により大きな進歩を示していることがわかる。

なお、平均化しない各個人の変化の様相をみると理解・表現共に変化のみられなかったのは重度群に2名いる他は、いずれも2~3段階の変化をしめしており、きわだった変化を示した者はない。そしてこの傾向は3群ともに共通にみられるものであった。

問27, 28については、重度群に6名、中度群に2名、軽度群に1名おり、その殆どが過去にその様な事があったとするものである。

次に言葉の持つ特異さについては、問29~39までを一括にし、その傾向をみたのが第8表である。

重度群に於て特異さを示すものの割合が少ないこと、及び同群で現在の方が多くなっているのに対して、軽度群では、わずかながらその逆の傾向が出ている事は、言葉の発現の遅れる重度群であるが故の当然の結果であろう。しかし軽度群において現在示されている特異さのうちの半数近くが過去からずっと続いているものであることは注目すべき結果といえるであろう。なお種々の特異さのうち重度群と軽度群の間の大きな差を見出すことはできなかったが、重度群の中で過去ではみられなかったものが現在みられる様になった特異さとしては問31, 38をあげることができるし、軽度群で現在みられない特異さとしては問31, 32, 33, 34, 35があげられ、そのうち問32, 34, 35については、過去・現在ともにその特異さはみとめられていない。

次に言語のもつ特異さの中でも、人間関係の方がより強い影響を与えていると考えられるもの3問について検討を加えたのが第9表である。

言語の面にみられる他への関心のなさを知ろうとしたために設けられた3問であったが、他人の会話に興味を示さないという問いは、会話のない子どもをみている親にとっては、ことあらためてその行動の有無を評価する以前の問題であり、他の人間への関心が高まっているにもかかわらず、興味を示さないことによってはじめて親

第9表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
問40~41	過去にのみみられたもの	8	44.4	5	41.7	4	40.0
	現在みられるもの	1	5.6				
	過・現、共にみられるもの					1	10.0
問42	過去にのみみられたもの	1	11.1	3	50.0	3	60.0
	現在みられるもの	3	33.3	1	16.7		
	過・現、共にみられるもの	1	11.1	1	16.7		

第10表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
固 執 性 問43~52	過去にのみみられたもの	14	15.6	15	25.0	12	24.0
	現在みられるもの	16	17.8	8	13.3	7	14.0
	過・現、共にみられるもの	10	11.1	3	5.0	7	14.0

の関心を得る項目であったため別に集計した。

全体的にみて、ここでも過去の状態から現在の状態への変化は、かなり大きい。ただ軽度群にみられる過・現変化なしの1例は、幼児より終始一貫常に多弁、多動でありまわりの大人から行動を抑制される機会も多く、その事が話しかけられる事への拒否的行動が続いている原因と考えられる。

<固執性>

物への固執、行動のくり返しなど固執性もまた自閉児といわれる子ども達が示す一つの大きな特徴であり、その事が彼等の生活経験をせばめ、新しい刺激の取入れを困難にしているようである。その固執性がどの様な特徴をもつか、具体的な行動として選ばれた問いは次のようなものである。

- 問43 同じ事を何度もくり返している
 - 問44 いつもきまったものを持っている
 - 問45 物を集める事を好む
 - 問46 同じ事をくり返してやりたがる
 - 問47 まわりにかまわず自分で決めた通りに動かそうとする
 - 問48 同じ状態しておかないと気がすまない
 - 問49 自分が決めた事を他人にも要求する
 - 問50 何かをやり始める前に、おまじないの様に同じ動作をする
 - 問51 新しいものを嫌う
 - 問52 いつも同じものを着たがる
- 結果は第10表に示す通りであり、ここでも中軽度群で

は現在みられるものが過去にみられたものより減じているのに、重度群ではその逆になっていること、及び軽度群でも同じ固執性が続いているものの数は決して少なくないことがわかる。項目別の特徴としては3群を通して最も多くその特異さがあげられた問は46であり、この質問に回答のなかったものは全被調査者のうち2名にすぎなかった。次に多かったものとしては問36、48をあげることができるし、過去にみられたが現在では数がへって来ている項目としては問47、51がある。

<知的発達の状態>

自閉児といわれる子ども達の中にある種の才能を持つものがあるということは、すでに知られていることではあるが、それが社会生活の中でどの様に使われるか問題であると同時に、最近では、それ等特殊な才能を持つものは別として自閉児の多くは知恵遅れと極めて近いところにあり、むしろ、その事を正しく認識しないことが彼等の予後を悲惨なものとしているときえいわれているし、われわれが扱っている例の中でも自閉性がかかなり寛和された時、いわゆる精神薄弱児と同じ様な状態を呈する例がないわけではない。しかしわれわれが今考えている知的能力とは何であるのか、そこへの吟味なしに彼等の能力を云々することが果してできるかどうか、問題は大きい。そこで今回はきわめて常識的に経験上予後と関連がありそうだと思うものをひろい出してみた。

まず最も関連の深いものとしては遊びの様子をあげることができるであろう。それも物に対する関心、物の操作は知的発達と関連の深いものと考え、物とのかかわり

野田：自閉症状把握のためのチェックリスト作成のころみ

をみるため

- i 物で遊ばない
- ii おもちゃでないもので遊ぶ
- iii おもちゃで遊ぶが本来の目的通りには使っていない
- iv おもちゃで遊ぶ

の4段階を設定した。(i)に0点(ii),0.33点,(iii)0.66点,(iv)に1点をあたえ各グループの平均得点を算出したのが第11表である。重度群では過去と現在で殆ど変化がないのに対して、過去では同じ程度の中度群がかなりの変化を示し、軽度群では幼児期すでに本来の目的通りではないにしろおもちゃで遊んでおり、現在ではすべてのものが玩具で遊んでいることがわかる。個々にみても重度群に過去、おもちゃで遊ぶにチェックされたものはいな

いし、軽度群に物で遊ばないと答えたものはいない。

第11表

		重 度 平均得点	中 度 平均得点	軽 度 平均得点
遊 び	過去	0.39	0.33	0.66
	現在	0.37	0.83	1

次にあげる第12表は、その他の面での知的発達を予想できるものをあげた結果である。過去において知的発達を予想できるものは明らかに軽度群に多いが、重度群における変化が大きく、現在では両群の差はちぢまっている。これは、子どもの現在の状態像を知っているわれわれにとっては意外な結果であり問題の設定に問題があったことがわかる。即ち、「文を読む」等は明らかに彼等の

第12表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
大人や子どもの動作のまねをする	過去						
	現在	2	22.2	2	33.3		
記憶力がよい	過去	2	22.2	4	66.6	2	40.0
	現在	7	77.8	5	83.3	3	60.0
文を読む	過去			2	33.3	1	20.0
	現在			4	66.7	5	100.0
遊具を組立てて遊ぶことが得意	過去	1	11.1	1	16.7	2	40.0
	現在	2	22.2			1	20.0
自分で言葉を作って使う	過去	1	11.1	1	16.7	2	40.0
	現在	3	33.3			2	40.0
計	過去	4	8.9	8	26.7	7	28.0
	現在	14	31.1	11	36.7	11	44.0

第13表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	家 数	%
一人にされると全く何もしない	過去	2	22.2	3	50.0		
	現在	1	11.1			1	20.0
目的的な活動のためには大人の働きかけが必要	過去	1	11.1	3	50.0	1	20.0
	現在	5	55.6	3	50.0	2	10.0
興味のないものは教えてもおぼえようとしな	過去	4	44.4	4	66.7	5	100.0
	現在	6	66.7	6	100.0	2	10.0
計	過去	7	25.9	10	55.6	6	40.0
	現在	12	44.4	9	50.0	5	33.3

第14表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
一人で活動的な遊びを展開する	過去	1	11.1				
	現在	3	33.3	2	33.3	2	40.0
友達のやっているのをみて自分もやろうとする	過去						
	現在			6	100.0	4	80.0
学ぼうとする意欲がある	過去						
	現在			2	33.3	4	80.0
計	過去	1	3.7				
	現在	3	11.1	10	55.6	10	66.7

状態を、この結果があらわしているといえることができるが、記憶力が良いかどうかという判断となると一定の基準があるわけではなく、むしろ全体像との関係で評価されている結果とみた方がよく、予後がかなりよい状態を示しているものが、幼児期にプレイ室でみせた特徴をあげたつもりであつたが、その点知的発達をおさえるものとして、どの様な問題を取りあげるかは更に吟味が必要であろう。

知的発達のもう一つの側面である意欲についての結果は第13、14表である。

第13表は意欲のなさを、逆に第14表は意欲の出て来た様子をきいた結果である。過去において意欲的な行動とみられたとするものは極めて少なく、重度群では現在でも「遊び」の面で3名にみられただけであるが、軽度群では年長になるに従い、かなりの変化のあることがわかる。それにひきかえ、意欲のなさを示す質問では、両群の差はあまり大きくないばかりか過去ではむしろ重度群に「意欲なし」に回答したものが少ないことは年長になって意欲を失ったとみるより、前述の問同様全体像との関係で母親が反応したとみた方がよさそうである。

知的な側面に関しては、あまりに設問がおおざっぱであり、日頃接している自閉児の状態像を把握し得たというにはほど遠いものであり、今後の吟味、改定がもっとも必要なことを痛感した。

<生活習慣>

他とのかかわりの中で生きようとする自閉児にとって、社会的な課題である生活習慣の自立のおくれ、特異さもまたしばしば指摘されているところであり、その状態をつかむために設けられたのが以下の質問であり、結果は第15表に示す通りである。

自立の程度

食事 i 自分で食べようとしな

- ii 手づかみで食べようとする
- iii こぼしながらも、スプーンや箸を使って食べる
- iv 一人で食事ができる
- 排泄 i おしっこをまったく教えない
- ii おしっこを教える事があるが、常に注意していなければならない
- iii おしっこは教えるが、衣服の着脱や始末などに手伝いが必要である
- iv ひとりだけでできる(まったく手がかからない)
- 着脱 i 衣服の着脱はまったくひとまかせ
- ii 指示すればやるが一つ一つの動作に援助が必要
- iii 口だけの指示でやる
- iv まったくひとりだけでできる

生活習慣にみられる特異さ

- 問53 食べ物の好き嫌いがはげしい
- 問54 特定のものしか食べなかったり、時間をずらしたり、場所をかえたりすると食べない事がある
- 問55 他人のものと自分のものの区別がなく、ほしいものがあれば誰のものでもとって食べてしまう
- 問56 食事の途中で立ち歩く
- 問57 夏夜中にひとりで遊んでいる
- 問58 場所が変わるとねむれない
- 問59 場所をかまわず衣服を脱いでしまう
- 問60 いつも同じものを着たがる
- 問61 少しでもぬれるとすぐぬいでしまう

第15表は自立の程度をあらわしたものであり、得点1が完全な自立を示す。三群とも三つの項目中では衣服の着脱の遅れが目立ち、年齢が大きくなって、ほぼ他のものの自立の程度にまで追いつていることがわかる。しかし、生活の最も基盤となるべき生活習慣の自立が平均

野田：自閉症状把握のためのチェックリスト作成のころみ

第15表

		重 度 平均得点	中 度 平均得点	軽 度 平均得点
食 事	過去	0.41	0.52	0.55
	現在	0.79	0.92	0.89
排 泄	過去	0.57	0.57	0.67
	現在	0.85	1.00	1.00
着 脱	過去	0.04	0.33	0.33
	現在	0.61	0.90	0.89
計	過去	0.34	0.47	0.52
	現在	0.75	0.94	0.92

年齢12.8歳におよぶ今日まだ軽度群においてさえ若干の問題を残しているということは、彼等の療育を考える場合今後の大きな課題となるべき問題であろう。

なお、第16表は生活習慣の特異さについての質問の結果をまとめたものである。

三群を通じて、やはり食事に関する問題が目立ち、それも重度群において年長にまで残存していることがわかる。生活習慣の特異さに関しては、重度群に於ても、年

第16表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
食 事 問53~56	過去にのみみられたもの	11	30.6	16	66.7	6	30.0
	現在みられるもの	2	5.6				
	過・現、共にみられるもの	11	30.6	1	4.2	2	10.0
す い み ん 問57, 58	過去にのみみられたもの	4	22.2	3	25.0	2	20.0
	現在みられるもの	1	5.6			1	10.0
	過・現、共にみられるもの	2	11.1				
着 脱 問59~61	過去にのみみられたもの	2	7.4	6	33.3	3	20.0
	現在みられるもの	2	7.4	2	11.1		
	過・現、共にみられるもの	3	11.1	2	11.1		
計	過去にのみみられるもの	17	21.0	25	46.3	11	24.4
	現在みられるもの	5	6.2	2	3.7	1	2.2
	過・現、共にみられるもの	16	19.8	3	5.6	2	4.4

第17表

		重 度		中 度		軽 度	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
自 己 統 制 問62-65	過去にのみみられたもの	12	33.3	12	50.0	10	50.0
	現在みられるもの	4	11.1	2	8.3		
	過・現、共にみられるもの	11	30.6	1	4.2	1	5.0

長になってその問題が出て来たというものは比較的少なく、むしろあまり変化していないのが特徴であろう。

<自己統制>

最後に、自閉児の社会適応を困難にしていると同時に、彼等の扱について周囲に多くの迷いや混乱を生ぜしめているものに、彼等自身の持つ自己統制力の欠如をあげることができると考え、それ等に関する質問を設け回答を求めた。

問62 自分のしたいことを禁止されるとおこっかみ
ついたり、けったりして手がつけられない

問63 禁止されたことをやめられない

問64 店や他人の家で、ことわりなしに欲しいものをもつて来てしまう

問65 はげしいたずらや、ひとりでどこかへ行って
しまうため一時も目が離せない

結果は第17表に示す通りであり、過去に於て重度群より軽度群に多くみられた自己統制力のなさも、重度群ではその後の変化が少ないのに対して、軽度群ではかなり減じているのがわかる。また、過去にはみられなかったにもかかわらず現在みられるようになったものが重度群

において約10%あったのに対し、軽度群では0であり、この群において着実な変化をしている事がわかる。

IV ま と め

第18表

		重 度 群	軽 度 群
感 覚		過去より現在に特異さを示すものが多くなっている	過去では重度群より特異さを示すものが多いが、年長時ではあきらかに減じている
	社 会 性	変化あり(年長時に減じている)	過去では重度群より特異さ多変化あり(年長時に減じている)
言 語	発 達	理解力より表現力の方がおとる	
	特異さ	変化あり	表現力にみられる進歩は著るしく、殆どが対話可能
固 執 性		過去より現在に特異さを示すものが多くなっている	大きな変化なし
知 的 発 達		過去より現在に特異さを示すものが多くなっている	大きな変化なし
意 欲		過去では重・軽度群共にあまりみられず	幼年期より重度群との間に差あり変化あり
	生 活 習 慣	大きな変化なし	変化あり
自 己 統 制		衣服の着脱に両群とも大きな変化あり	
		変化あり	変化あり
		大きな変化なし	変化あり

これまでの結果をやや乱暴ではあるが大きな特徴をつかみまとめたのが第18表である。重度群の感覚、言語の特異さ、固執性にみられる、過去より現在に、より特異さを示す回答が多くなっているのは、それらの面に当初われわれが予想した以上に発達とのかかわりがある事を示すものであろう。例えば言語等については、その特異さは言語が発現してこそ問題となるもので、言語のないものにとっては意味のない設問である事は当初より考えていたが、感覚、固執性についてもそれがみられたことは、今後自閉症状を把握するためのチェックリストを作る場合厳密におさえられなければならない点であろう。即ち発達の遅れがある故にまだ出現しない行動であるのが、その行動がないことが自閉症状の軽さを意味することであるかの吟味の必要性である。

次に、チェックリストを作った者と、対象児を三群にわける為の検討を作った者が同一であるため、三群にわたる基盤となっているものが、チェックリストを作る上での基盤にもなっており、全体を通し、重度から中度、軽度と自閉症状が軽いと考えられる結果になっていることは、むしろ当然の結果といえるであろう。なお中度群については、これまでの文中では殆どふれていない。それは、ある項目では重度群と同じ様な傾向を示し、またある項目では軽度群と似た反応を示しているが実際の状態像をみてもまさにその通りで、例えば言語的には軽度群に入れたいが、適応という面からはどうしても軽度群には入れられないという種類の子どもであり、結果の整理の冒頭でもふれたが、明らかに配置されるものを配置したあと、むしろどちらへも入れられぬあいまいさを持ったものがここに入れられ、それがそのままこの結果に出ているといつてよいであろう。

更に、実際の状態像のへだたりからみれば、今回のチェックリストにあらわれた重度群と軽度群の差は予想よりかなり下まわるものであった。それは過去にさかのぼってきいているという不確実さもさることながら、この種の質問に答える場合、全体像との関係で反応してしまうことが多いため、軽度であればある程、また、こんな問題が、という気持で本人の行動を評価しやすく、それに反し重度の場合は、その反対の傾向がみられるという事である。

更に、多くの調査で指摘されている点に、事実の客観性に対する不確実さがあるがここでも例外ではなかった。例えば手をヒラヒラさせるという行動などは、対象児の過去の行動観察記録をみれば、かなりの数出現しているにもかかわらず、調査ではそれ程多くない。その差はこの調査の回顧的な母親の評価にたよったという事も大きな原因であろうが、言語の出現が大きな関心事である頃の母親にとって、われわれにとっては一つのサインとみられる行動も、あまり不安の材料になるとも思えない場合、見過されてしまいがちであるという事実、これ等の事実をふまえての吟味こそ大切であり、これまた改善がなされなければならない問題であろう。

被験者が少なく予後との関連について一般的な傾向を云々することは出来ないが、今後この結果を再び一人一人の症例にもどし、更に使用にたえ得るチェックリストがつくれなければならないであろうと同時に、この研究を更に一歩すすめるためには、変化しやすい側面と、しにくい側面をあきらかにし、そこに加えられている扱いとの関係を明らかにして行かなければならないと考えている。